編集月旦　2014年８月号

★「丈風夏のセミナー　高齢者が歴史をつくるとき　いま、この人たちの声を聴こう」をお届けいたします。夏というよりもう秋の気配。「秋の活動のために」と解してください。発言をされている方々は、それぞれにたしかなこの国の将来像をお持ちです。読みすすむうちにその姿が見えてくるとともに、話されているご本人の声が聞こえてくるように感じられます。

☆７月２９日・内閣府フォーラムでの講演で、堀田さんの声は嗄れていました。この夏は東奔西走、「毎日が月月火水木金金」といったいそがしさで、全国の自治体をまわって講演をしておいでです。「支えられる高齢者」の介護などの地域移行（「地域医療・介護推進法」による）とともに求められる「支える側の高齢者」の自主参加を呼びかけて。

☆「毎日が日曜日」に慣れた退職後の人たちに「共生の文化」を説いています。住んでいる地域に関心が薄く、自分と家族のためにだけ余生を過ごして、介護・医療は地域に求める暮らしが「恥ずかしい」と感じる風習を、堀田さんは「共生の文化」と呼んでいます。

☆住み慣れた地域での高齢者の「医療・介護」を包括的に確保する「地域包括ケアシステム」が目標です。原老健局長のくわしい説明と「支える側の高齢者」にむけた堀田さわやか福祉財団会長（７月に就任）の講演は、同時にそのことを訴えかけています。双方への理解と対応が、安心して地域で暮らすための高齢者の側の務めです。

★樋口さんの将来像は、歴史上で初の「人生１００年社会」。この昨年の講演（「高齢社会フォーラムｉｎ東京」・７月）は、この国の高齢社会を形成する活動のプロセスを理解する上での、まぎれもない歴史的重要文書です。

☆小宮山さんは「産業革命」から「プラチナ革命」へ。わが国は江戸時代にはすでに近代への準備をすませていたこと（途上国でなかったこと）、大量生産時代を終えて新しい価値ＱＯＬである「省エネ時代」にはいっていること、を具体例によって示しておられます。

☆秋山さんは高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案しておられます。東大のリーディング大学院での人材育成や柏市のまちづくりやこの９月に第２回「高齢社会検定試験」をおこなうなど、ご本人の成果の積み上げは明解です。

☆民主党顧問の藤井さんは、「戦争のない社会を守りつづける政治」「歴史に学ぶ政治」の課題を実践しておられます。近現代史研究会のオープンフォーラムはそのひとつ、「戦争」を中心テーマに昭和の歴史にその原因をさぐっています。安倍政権の「歴史に学べない」方向にその萌芽を見ています。４回に渡った取材を通じてそれが伝わってきます。

★わが国は「人生６５年（引退余生）」時代のあと、先がけて「人生９０年（現役長生）」時代を迎えているというのに、高齢者の意識も暮らし方も変わりませんでした。国の骨格は中年層がしっかり支え、若者の新たな力が加わり、女性の登用がすすむとともに、渋く輝く高齢者の参加が必要です。高齢者が自主的に社会参加しないかぎり、「高齢社会」の形成は遅延しつづけ、公助の負担は増え、現役世代から自助の要請が強まることになります。

☆失礼があればお恕しください。

☆新論考『丈人力のススメ　生々と「人生９０年」を生きる』２００ページ余を公開いたします。「Ｉ・熟成への道をたどりながら～Ⅵ・一高齢者としての八方玲瓏」です。ご関心のある一画を開いてみてください。出版を希望する方を募っています。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の目標です。（編集人　記）